「であい・ふれあい・まなびあい」から
「つながりあい・ささえあい」へ

おおっ！おおおか！
再発見

大岡集楽学校

大岡一〇区をフィールドに開催する地元学講座「であい・ふれあい・まなびあい」から「つなぎあい・にないあい」へをテーマに、昨年と今年の二年間、大岡全区を北から順に巡っています。今年度は、中央・中部・根越・芦ノ尻・笹久の五地区を探訪、地域を歩きながら、地域のみなさんと交流し、地域を再発見する意義深い講座です。各区を巡りながら、地元の方の説明や講師・宮下健司先生の解説を交えて地域のことをより深く学びましょう。

大岡地区住民自治協議会　会長 中村哲夫

其之⑦ 中部（ちゅうぶ）

平成28年
6/19(日)

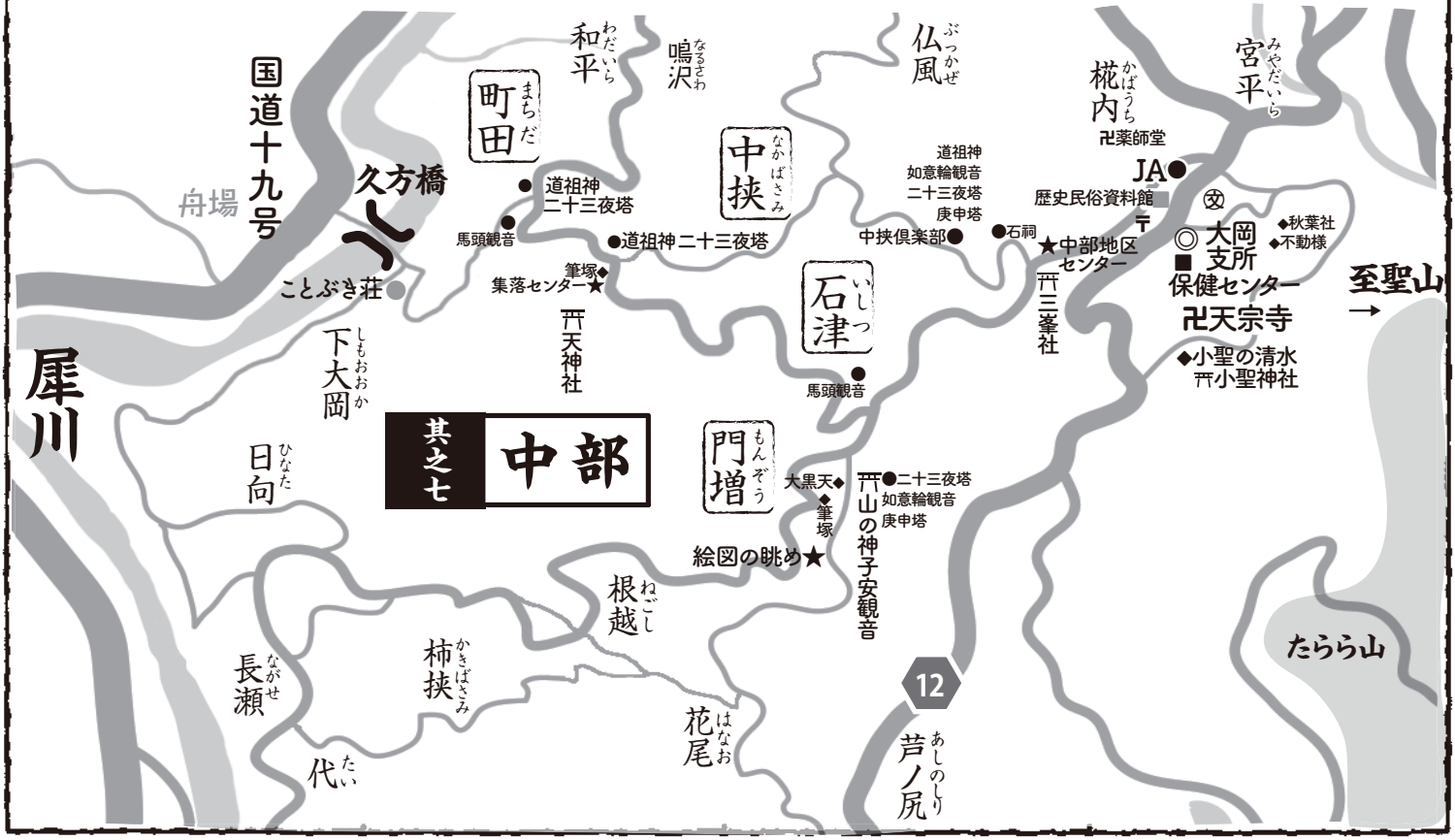
中部区 コース概略

移動は長野市マイクロバス
地域めぐりは徒歩移動。

◆天候によってはコース内容が変更になる場合もあります。

支所前（バス受付）開講式
⇒**中挟** 中挟倶楽部前石仏群など
⇒**町田** 道祖神
⇒**石津** 道祖神・天神さま
⇒**昼食** ＜中部地区センター＞ 中部区の方々の協力
⇒**三峯社**（山の神）
⇒**門増** 子安観音堂など
⇒**座談 & 講師のお話** ＜中部地区センター＞★

主催／ 大岡地区住民自治協議会・中部区　共催／ 長野市大岡支所・大岡中学校・大岡小学校・大岡小中PTA



❶ 中挟（なかばさみ）集落を歩く

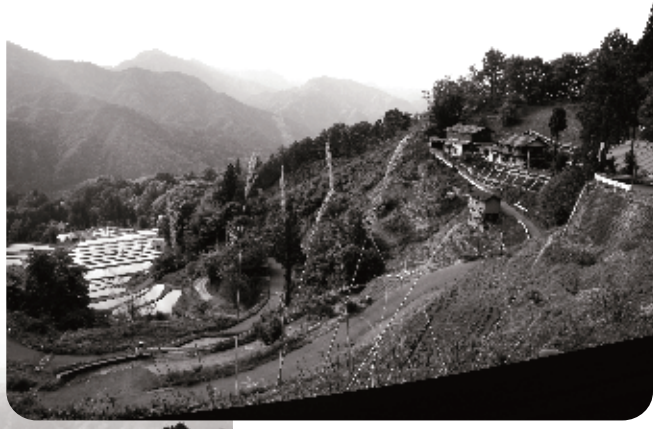
「大岡通り」と中部地区の村落。

◎現在「中挟集落」総戸数は5戸、しばらく前は十戸あったといいます。

◎江戸時代後期、天明七年（一七八七）の五人組帳によると中挟村は三十五人、慶応四年（一八七二・明治元年）には男五十七人・女五十一人の合計一〇八人・田畑を持つ本百姓は二〇人と記載されています。

◎江戸時代、松代藩は領地支配のため藩政初期に領内を「通り」に分け区分しました。文政八年（一八二五）の「九通り」の区分には「大岡通り」の五十二カ村が記載されています。中部地区の「中挟村」「石津村」もこの「大岡通り」に属する村でした。

◎江戸時代初期、寛文四年（一六六四）の記録によると、大岡一村として統治されていても内部は小村から成り立っていたことがわかります。この四十有余の村々のなかに「中挟村」「石津村」「門増村」の記載があり、中部地区の村落が古くからあったことがわかります。また石津村から市後沢村まで十一カ村をまとめて「大岡石津組」あるいは「大岡根越組」と呼んだ場合もあったようです。（その他の三組＝大岡宮平組、大岡和平村、大岡川口村）



尾根と尾根のあいだに水を軸にした暮らし

谷の上方から下方へ
小聖からの清流を基軸に
水田と森で構成された
ひとの暮らしの小宇宙！

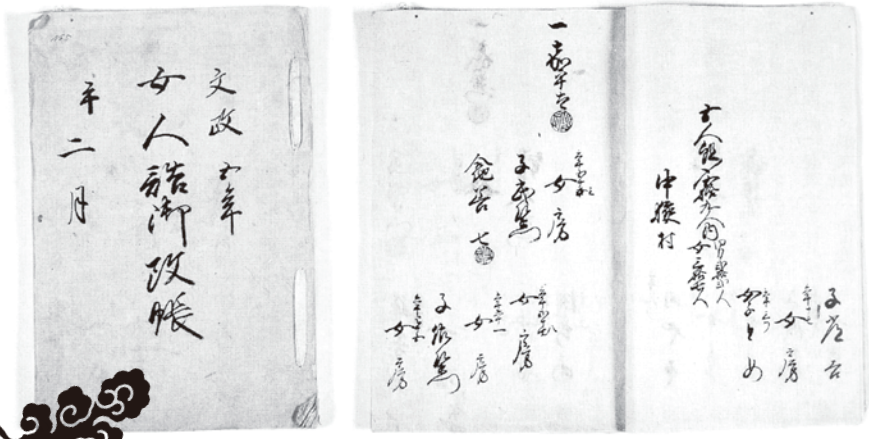
遠く山並み越しにのぞく神々しい「蓮華岳」のお姿がある。

中部地区センター前の小さなお堂

三峯社（山の神）

三峯社のお札を納めた木造の拝殿とその後ろに石祠がある。遠くの山並みを見つめる清楚で小さなお堂。少し前まで当たり前にあった人の心の足跡を教えてくれる。

文政五年（1808）石津組女人詰改帳　中挟村の頁から（『大岡村史』より）



中挟 女人詰御改帳

おおっ！ここがすごいぞ大岡

よりみちメモ

享保6年幕府は全国規模の戸口調査を命じ、当初男だけの「人詰御改帳」であったところに、松代藩でも女性を含めた戸口を報告することになりました。石津組（門増丸山氏蔵）に残る「女人詰御改帳」はその経緯の資料として貴重なものです。幕末の頃から盛んになった養蚕には女手が重要な労働力で、人々の異動が激しくなった事情もありその掌握をはかったようです。

② 中挟倶楽部（なかばさみくらぶ）前 石造物群

道祖神の隣は庚申講・二十三夜塔人の集まる場所

◎登り口の木と木の間に「七五三縄」を張り「結界」になっている。道祖神は自然石でワラで編んだ「おやす」が被せられている。

二十三夜塔・庚申塔

道祖神

道祖神の横手に中挟倶楽部の建物がある。

七五三の注連縄

「七五三の注連縄」

横縄に右から七・五・三本の藁束を下げる七五三縄（しめなわ）起源説のひとつは、天照大神が天岩戸を出た後、布刀玉命が岩戸に張った結界だといいます。天神七代、地神五代、日向三代の神々を表すと等の意味もあるそうです。

おやす

おやす／ワラで編んだ注連縄のこと。神様の食べ物を入れる器で神の依代。他の注連縄とともに家内に祀る。大岡では大きめのワラ帽子のような三角形。

「如意輪観音」

「庚申塔の青面金剛」

報徳訓

父母根元在天地令命　身体根元在父母生育
子孫相続在夫婦丹精　父母富貴在祖先勤功
我身富貴在父母積善　子孫富貴在自己勤労
身命長養在衣食住三　衣食住三在田畑山林
田畑山林在人民勤功　今年衣食在昨年産業
来年衣食在今年艱難　年々歳々不可忘報徳

父母の根元は天地令命に在り
身体の根元は父母の生育に在り
子孫の相続は夫婦の丹精に在り
父母の富貴は祖先の勤功に在り
我身の富貴は父母の積善に在り
子孫の富貴は自己の勤労に在り
身命長養衣食住の三つに在り
衣食住三つは田畑山林に在り
田畑山林は人民の勤功に在り
今年の衣食は昨年の産業に在り
来年の衣食は今年の艱難に在り
年々歳々報徳を忘るべからず

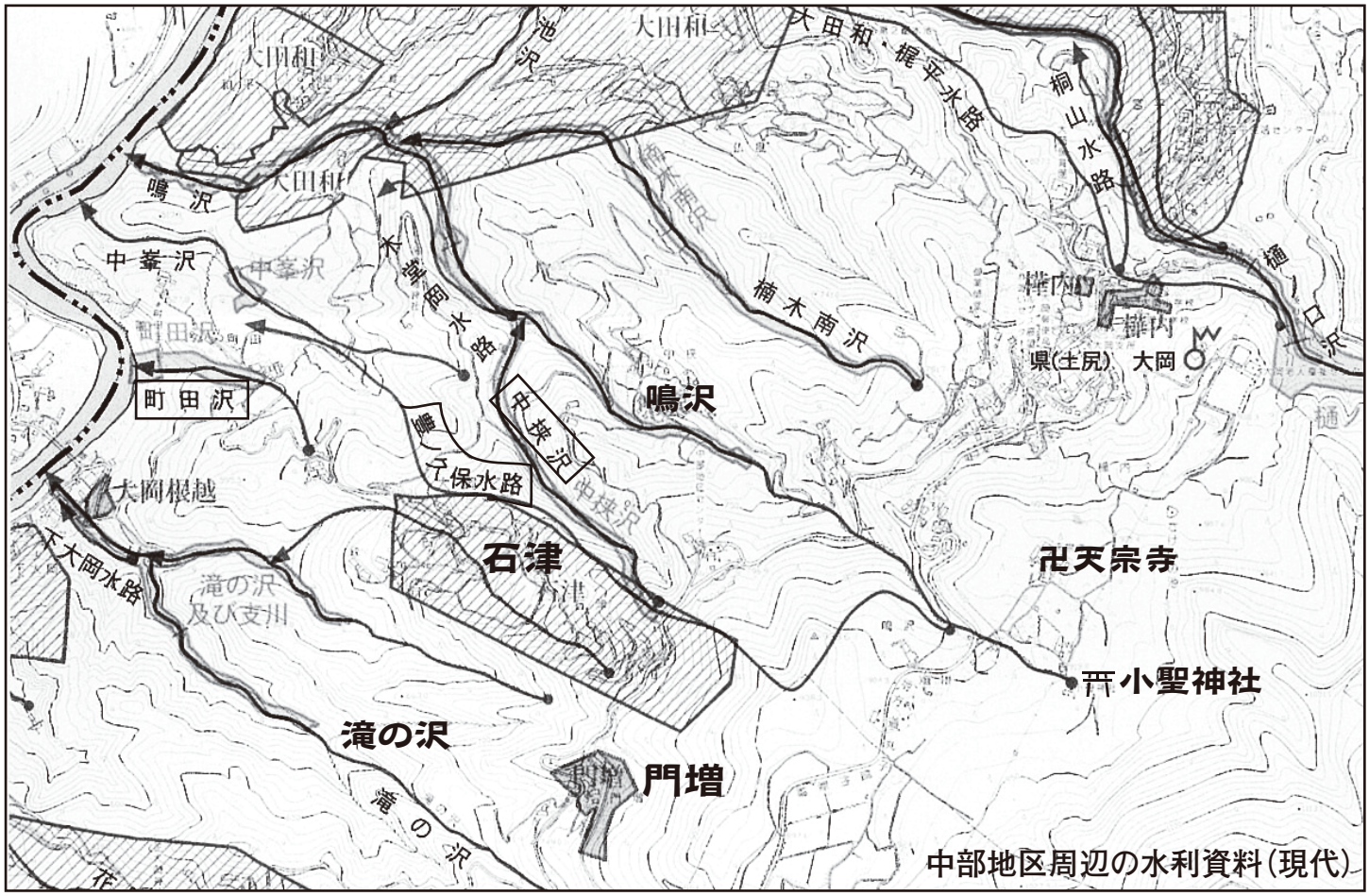
●倶楽部建物の床の間に二宮尊徳の肖像が描かれた報徳講（報徳訓）の軸が掛かっている。

③ 町田 集落を歩く

尾根に囲まれた田園風景、静かに時を刻む陽だまりの集落。

◎前山の裾野に広々とした田畑の風景がひろがる。長屋門を配した土壁の旧家なども残っています。

道祖神 二十三夜塔。



中部地区周辺の水利資料(現代)

「矢竹」

中部地区屋敷地周辺の植生観察

ヤダケは竹と名があるが、成長しても皮が桿を包んでいるため笹に分類される。矢の材料となったり、粘りのある素材から籠などの加工素材として用いられ屋敷地周囲に植えられていたとも考えられる。

「番水ばんみず」

助け合う共同水利の知恵

町田地区の水田は「小聖の水」が水源で、昼間は石津、夜は町田が水を入れたと伝わっている。

おおっ! ここがすごいぞ 大岡

よりみちメモ

④ 石津（いしづ）集落を歩く

上組（かみ）・中組（なか）・下組（しも）開けた谷に連なる

◎現在「石津集落」総戸数は十五戸、上組／6軒　中組／5軒　下組／4軒。

◎江戸時代石津村から市後沢村まで十一ヵ村をまとめて「大岡石津組」と呼んだように石津は中部地区では大きな村落でした。

◎江戸時代後期の資料によると、善光寺地震のあと弘化四年の調査から石津組が大岡の中で宮平村に次ぐ大きな組だったことが伺えます。また、傾斜地の地形もあってか善光寺地震では圧死などで石津組で二〇人の方が亡くなったと記録にあります。

江戸時代後期の石津組の人口

石津村・中挟村・白井沢村・代村含む合計。

石津組	文化2.4	(1805)	男 385
	弘化4.2	(1846)	826(431,395)
	安政2.2	(1855)	841(439,402)
	同 3.2	(1856)	855(440,415)
	同 4.2	(1857)	855(437,418)
	慶応3.2	(1867)	829(420,409)
	同 4.2	(1868)	839(423,416)

合計（人）　女、　男

大岡では珍しいお社のなかの双体道祖神石像……

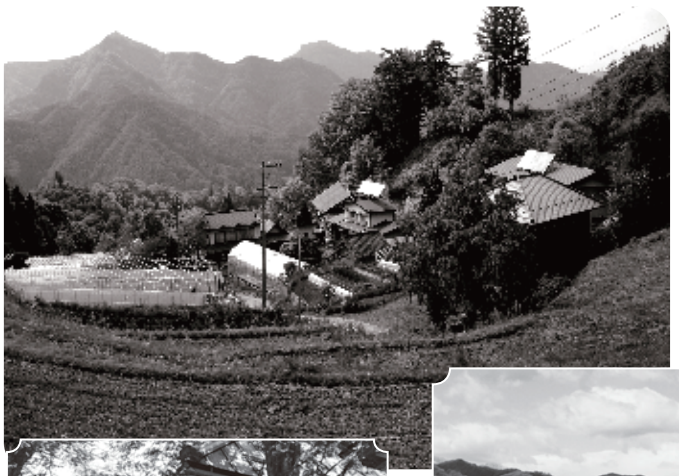
唐様の屋根が彫られている。

それぞれの村落の境界・世の十方とつながる「道」道祖神はその交差点、道の境界に立てられる。

風景

おおっ！ここがすごいぞ大岡

よりみちメモ



谷から涼やかな風が吹いてくる

蓮華岳を望む谷沿いの集落

⑤ 天神さまの甘酒祭り　石津

子供の成長と地区の繁栄を願う恒例の春祭り。

◎ウワミズザクラが咲き、幟が風に翻る季節、天神さん（菅原道真像）が祀られている神社に集う。春祭りは神饌（神様の食事）に、マス・人参・白菜をお供えし、祭祀と直会をし、甘酒の振る舞いをする。現在は四月二十九日に行われている。

◎現在は神事と別に石津集落センターに女性も集い、恒例の春祭りの直会としている。かつては甘酒を陶器の甕でつくった。その甕は今でも石津集落センターに保存されている。

◎天神さまのおかげで、火事になったり、お産で苦しむ人はいないと伝わる。天神様堂内に楽隊の大太鼓、小太鼓がある。ここに笛、トライアングルが加わった。かつては子供たちも学校は二時限までで祭りに参加した。祭りはムラの単調な生活に節目を与える、精神を浄化する、村人の絆を確かめ合う。村人が一つにまとまる場ともなった。

◎雪形に種蒔き爺さん　武田菱　代掻き馬が現れると…春祭りをして、種蒔き、農作業が始まる。秋祭りはこの年の実りに感謝する収穫祭となる。

健やかな成長を願ってお祓いを受ける。

春風にひるがえる祭礼の幟旗。

集落センターで女衆と一緒に賑やかな直会。

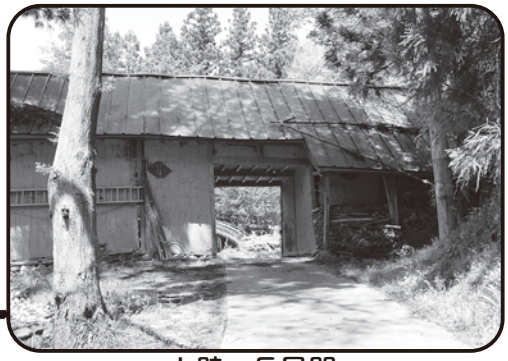
昔の甘酒の大甕
米を持ち寄ってこの甕で甘酒を作った。

菅原道真公の木像を祀った社殿の上には偉人の姿絵

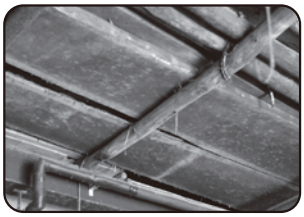
おおっ！ここがすごいぞ大岡

よりみちメモ

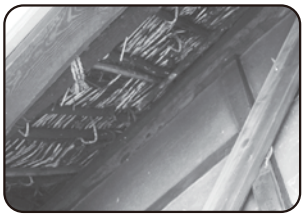
石津の古民家 風景と知恵



土壁の長屋門

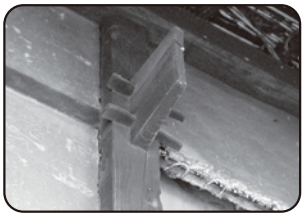


土間天井に材木を保持



麻殻で葺いた屋根下地

三峯さんの盗賊除けお札



玄関正面の柱に臍木（ほぞ）

土間の玉土
時間を経て浮き出てくる素材の美

6 門増（もんぞう）集落を歩く

弘化四年に絵図描かれた風景が残る

松代藩主真田幸貫が善光寺地震の視察後お抱え絵師に描かせた。

丹誠な山暮らしを仰ぎ見る…門増

◎現在「門増集落」総戸数は４軒）

◎松代藩主真田幸貫が善光寺地震の視察後お抱え絵師に描かせた絵図の一枚にこの「門増」の図が含まれる。なお他地域の災害描写目的の絵図と比較して大岡地区の絵図には災害とは別に鑑賞用絵画としての用途があったのかと思わせるものが多いが、この門増の青木雪卿（せっけい）の絵図もそういった風光明媚な一枚。

現在の門増集落

山中にあって教育熱心な土地柄

石津と門増の筆塚

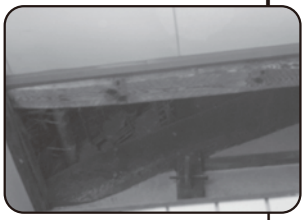
◎大岡の村内には江戸時代寺子屋教育で師の威徳を留めた筆塚が多くみられます。山村にあってもその教育熱は伝統的に継承されていたといっていいでしょう。

◎この地域の記録に残る寺子屋では、石津地区で寛政十年頃から明治頃まで読み書きを教えた久保田惣兵衛、同じく同時代の門増地区で読み書きを教えた丸山助左衛門、丸山助太郎の名があります。

石津の筆塚、集落センターの近くの道沿いにある。

門増の筆塚、義美門弟中と銘、180余人の門弟があった丸山助左衛門の筆塚。

扇を象った明かり取り



軒をせり出した船枻（せがい）造り

6 門増（もんぞう） 子安観音堂周辺

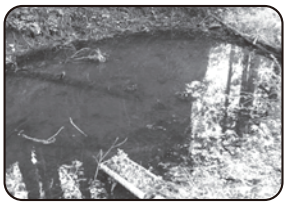
イチイの大木に護られた門増地区の聖域

門増地区東の斜面の中ほどに両脇にイチイ（櫟・一位）の大木を両脇に配したお堂。現在中には三つのお社があり、真ん中に戸隠奥社大権現の神札が納められている。右に「子安観音」の木像を納めた厨子がある。江戸時代までの神仏習合の信仰がかい間見える。ヒトリシズカ・ルイヨウボタン・サラシナショウマ・ユキザサ・ラショウモンカズラなど他地域と比較して珍しい植生もみられる。

子安観音

菊紋を冠した厨子に坐す「子安観音像」大岡では木像は珍しい。門増という集落名の起源は伝わっていないが、一門末広がりの願いか込められていたのかもしれない。

二十三夜塔・庚申塔・馬頭観音



堂の下にある湧き水の池

奉納大乗妙典供養塔

（ほうのうだいじょうみょうてんくようとう）

◎大乗妙典とは私たちを迷いから悟りの世界に導いてくれる経典で一般的には法華経をさすといわれています。この経典を読誦、あるいは経文を奉納した善の起因が先祖や地域に暮らす人々に充分に廻るよう願いをかけて建立（明治四十一年）されたものです。

◎法華経は「観音経」を収録している経典ですので現代のような宗派分けでこだわることなく集まってお題目を唱えたのかもしれません。大岡では珍しいのもので、この門増地区は信仰の厚い人が暮らしていた足跡とも言えるかもしれません。

安山岩の礫（れき）

下の層に水脈がある。一帯は地質のため植生も他と違い珍しいものが多く特別な場所。聖山周辺の地盤特徴から「石津」という地名も関連あるのかもしれない。

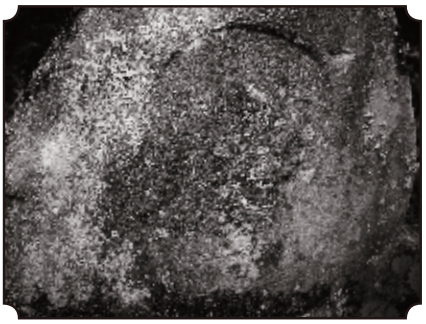
大岡の宝！岩と水の聖域空間

おおっ！ここがすごいぞ大岡

よりみちメモ

巨石の石垣

大黒天の石刻像



苔むしており残念ながら線刻や文字がはっきりはわからない。

時を経て移ろっていった聖山一帯の仏教文化の水脈。

◎門増集落の観音堂一帯は安山岩の礫が多く下の層に水脈がある、いわば岩場からは水を生成し濾過している特別な地とも言えます。観音堂の下に用水池と別にした種池のような池が残っています。

◎池下にある厚い茅葺きの大屋根の旧家は石垣にかなりの大きな石が使われ、家の背後には大きな自然石がありその横には「大黒天」の石刻像があります。

厚い茅葺き屋根と石垣